

琉球大学学術リポジトリ

ライフスタイル要因からみた運動経験者に関する研究：過去の運動経験とライフスタイル要因との比較

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-08-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 並河, 裕 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/1353

ライフスタイル要因からみた運動経験者に関する研究 — 過去の運動経験とライフスタイル要因との比較 —

並 河 裕*

Relationship of Life-style and an Experience to have belonged to an Athletic Clubs.

— Comparatively Analysis of Life-style Factors and the Past Exercise Experience —

Yutaka NAMIKAWA *

Abstract

The purpose of this study is to make a characteristic of life-style of a university student who has an experience to have belonged to an athletic clubs.

Questionnaires containing 29 items are administered to a total 518 students. Four hundred sixty-two questionnaires were returned, resulting in a response rate of 89.1%. Factor analysis is used to identify the overall structure of student's life-style. Factor scores are then compared for differences in gender and marital status. The main results were summarized as follow:

1. There exist four factors representing dimensions of student's life-style. They are named as "Traditional Family", "Positively", "Leading Faction", "Cooperation".
2. When gender is considered, mean factor scores differ significantly for 3 of 4 factor dimensions. These findings confirm that life-style is an observable construct and differs according to gender.
3. When student is considered by a grade of an exercise experience, mean factor scores differ significantly for 2 of 4 factor dimensions.

I はじめに

現在の社会は、労働時間の短縮等に伴う余暇時間の増大や生活に関する情報の多様化さらには、価値観や生活意識の変化などにより人々の生活環境が著しく変化している。

生活スタイルが人々の価値観の多様性によって大きく変化し、それに伴って、スポーツ活動も個人の欲求や価値観の違いによって様々な形態が現われてきている。例えば、民間のスポーツ施設や公共のスポーツ施設、あるいは学校のスポーツ施設といったような様々な運動施設のなかで、個人あるいは集団でといったように、多種多様のス

ポーツ実践が展開されている。さらに、生活5カ年計画にみられるように、余暇時間を欧米並みに確保することが強調され、ゆとりのある生活の中でスポーツ活動を行なうこと、スポーツを文化として生活にほど良く取り入れ、豊かな生活することが期待されている。さらに、最近の健康ブーム等にみられるように人々のスポーツに対する意識も年々高まってきているのが現状である。このよう著しい社会変化に伴って、スポーツ環境も大きく変化してきていると考えられる。一方、スポーツ経営は基本的にはスポーツ行動に必要な条件としての施設、プログラム、スポーツ仲間を整えることであると考えられている。つまり、スポーツ

*Phys. Educ., Coll of Educ., Univ. of the Ryukyus

行動のより良き発現の為のスポーツ環境を提供することである。しかし、運動者を取り巻くスポーツ環境は個人的要因、社会的要因、環境的要因等によって様々である。それゆえに、運動者の意識や実態を様々な角度から分析検討することにより、運動者にとってのより良いスポーツ環境を提供するための経営方針の立案が今日のスポーツ経営に求められている。

最近のスポーツ環境は、民間のスポーツ施設の増大にみられるように、従来の学校体育を中心に、そして地域における公共スポーツ施設等によって行われていたスポーツ行動が、すこしずつ企業経営としての民間スポーツ施設へ移行している。このことは、今後民間スポーツ施設の重要性が増すことはあっても、けっして人々のスポーツ活動が民間にすべて移行することを示してはいない。むしろ、人々のスポーツ欲求に応じたスポーツ振興に関わる方策を官民一体として進めていくことが求められているのである。

このような著しいスポーツ環境の変化の中では、個々の運動者のスポーツ欲求を把握するためには、新しい視点による運動者の分類及び特性の把握が必要である。社会学や経営の分野においては、ミッチェルら¹¹⁾による VALS 調査や飽戸ら^{23,24)}による NJWL 調査にみられるように、人々の行動原理の把握やマーケティングにおける市場分析等にライフスタイル分析が用いられている。一方、スポーツの分野におけるライフスタイル分析を応用した研究は、菊池⁹⁾や原田⁵⁾による民間スポーツクラブ会員を対象とした一連の研究、中高年者を対象とした岩井ら⁷⁾の研究、ライフスタイル・セグメンテーションによるスポーツ消費者の類型化を試みた中西ら¹³⁾の研究がみられる。このようにスポーツの分野においても、運動者の分析にライフスタイル概念を用いた研究が徐々に行われるようになってきた。しかし、これらの研究は対象者が民間のクラブ会員や中高年者といった比較的年齢の高いものを対象に行われており、大学生を対象にライフスタイル分析を応用した研究はほとんどみられない。これまでの大学生を対象にした研究例をみると、金崎や多々納と徳永^{8), 20), 21)}のスポーツ行動の規定要因に関する一連の研究、さらに丹羽ら^{14), 16)}による女子大生のスポーツ参加

を規定する要因や態度及び動機に関する研究、そして大学生や勤労青年を対象にスポーツ活動の実態や意識を研究したものなど、^{6), 12), 17), 18), 19)}数多くの研究がなされてきた。しかし、荒井⁴⁾は社会学的立場から、スポーツ行動に関する研究について問題を投げかけている。すなわち、従来の研究はスポーツ活動を成立させる条件分析が主で、これからの社会にはスポーツへの関わり方の分析が必要であると述べている。つまり、現代人のスポーツ行動を分析するためには、スポーツへの関わり方といった、従来とは異なった視点からの分析の必要性を指摘している。このスポーツへの関わり方分析にライフスタイル分析を応用する意味があるのではないかと考える。それゆえに、大学生を対象にライフスタイルと運動との関連を明らかにすることは意味があると考えられる。

そこで本研究では、大学生を対象に過去における運動経験の程度と運動者のライフスタイル要因を比較検討することにより運動経験者のライフスタイル的特性を明らかにすることを目的とした。

II 研究方法

1. 対象及び調査期間

本学（琉球大学）の教育学部に在籍している学生（1年次から3年次）を対象に質問紙法によるアンケート調査票を配布し1994年11月—1995年1月までに回収した（留置法）。

調査票は518名の教育学部所属の1年次から3年次の学生に配布され462名からの回答をえた。対象者の構成は表1に示したとおりである。

表1 サンプルの構成

	男子	女子	全体
1年次	44(30.8)	99(69.2)	143(100.0)
2年次	55(36.4)	96(63.6)	151(100.0)
3年次	81(48.5)	86(51.5)	168(100.0)
全体	180(39.0)	281(61.0)	462(100.0)

注) () 内は%を示す

3年次の全体は不明回答者1名を含む

2. 調査項目

調査項目は、個人のフェスシートに関する5項目、現在及び過去における運動経験に関する9項目、ライフスタイルに関する15項目と合わせて29項目で構成した。なお、ライフスタイルに関する項目は飽戸のライフスタイルの5次元尺度を援用し、それぞれの項目は「そう思う」、「まあそう思う」、「あまりそう思わない」、「全然そう思わない」の4件法による回答を求め、「そう思う」を4点から順に、3、2、1と得点を与え間隔尺度を構成しているものとした。

3. 分析方法

統計処理には、クロス集計によるカイ自乗検定を用い、ライフスタイルに関する要因の分析には因子分析を用いた。

Ⅲ 結果及び考察

1. 調査結果の概要

まず、調査対象者の運動経験と運動実施状況を調査結果から概観してみる。

小学校から大学にいたるまでの期間にどのような運動経験が成されているのかを、運動部に所属していたかどうかとの関係から検討してみる。表2は、小学校から大学における運動部所属経験の状況を示したものである。小学校では運動部所属者(49.4%)と非所属者(50.2%)にはほとんど差はみられない。しかし、中学校になると所属者が65.2%と非所属者に比べかなりの比率で上回っている。そして、高校では約10ポイントの差がみられるが中学校よりも、所属者が減少している。大学になるとさらにその差は広がり運動部所属者は全体の14.1%である。

表2 過去と現在の運動部所属状況

所属の有無	小学校	中学校	高校	大学
はい	228(49.4)	301(65.2%)	206(44.6%)	65(14.1%)
いいえ	232(50.2)	159(34.4%)	254(55.0%)	395(85.5%)

注) () 内は%を示す、不明回答者2名を除く

次に、大学生が学内及び地域社会におけるエリア・サービスやプログラム・サービスにどのように関わっているか。このことを大学や地域でのスポーツ行事への参加程度によって、その関わり方を概観していく。表3は大学及び地域でのスポーツ行事参加程度を、表4は運動施設利用状況をそれぞれ示したものである。大学におけるスポーツ行事参加状況は、「全てに参加する」(0.3%)、「たまに参加する」(31.0%)を合わせて31.6%で、「ほとんど参加しない」、「全く参加しない」を合せた68%を大きく下回っている。また、運動

施設の利用状況でもほぼ同様の傾向がみられた。一方、地域のスポーツ行事の参加状況は「全く参加しない」が最も多く71.6%を占めている。大学に比べまだまだ地域のスポーツ行事への参加は少ないと言える。しかし、運動施設の利用状況をみると地域での利用者比較的多く、約半数の学生が地域の運動施設を利用しているという結果であった。このことは公共スポーツ施設の充実が地域社会での運動をより促進し、広く一般にスポーツが行われるようになってきていることを示しているのではないかと考えられる。

表3 大学及び地域におけるスポーツ行事
酸化状況

カテゴリー	大学	地域
全てに参加する	3(0.6)	2(0.4)
たまに参加する	143(31.0)	44(9.5) 82(17.7)
ほとんど参加しない	121(26.2)	331(71.6)
全く参加しない	193(41.8)	3(0.6) 462(100.0)
無回答	2(0.4)	
全体	462(100.0)	

注) () 内は%を示す

表4 運動施設の利用状況
(大学及び地域)

カテゴリー	大学	地域
よく利用する	13(2.8)	22(4.8)
たまに利用する	134(29.0)	217(47.0)
ほとんど利用しない	121(26.2)	82(17.7)
全く利用しない	188(40.7)	138(29.9)
無回答	6(1.3)	3(0.6)
全体	462(100.0)	462(100.0)

注) () 内は%を示す

2. ライフスタイル要因の分析

大学生のライフスタイルを把握するため、15のライフスタイル項目について、主因子法によって固有値が1以上の4因子を抽出した。これら4因子の累積寄与率は47.8%であり、本調査に用いられたライフスタイル項目の全分散の約半分しかこの4因子で説明できない。このことはライフスタイルが複雑な構造をもつものでありこれらの変数でライフスタイル全体を説明できるものではないことを表しているといえる。これら4因子をバリマックス回転させ、それぞれの因子負荷量の大きい順に並べ替えたのが表5である。これら4因子の因子負荷量の大きさによって因子の解釈を試みる。

まず、第1因子は、家族や仲間のつながりを大切にし、お互いの力を合せることによって相当のことができるという考え方。さらに、昔から受け継がれてきた伝統を理解し、それを守っていこうとする考え方を表しており伝統派家族因子と名付けられた。第2因子は、「すこし無理だと思われる位の目標を立てて頑張る方だ」という項目や「遊びでも仕事でも、やりだすととことん熱中して、まあまあものにするほうだ」という項目、さらに「多少波風がたってもそれをおそれては何もできない、多少の反対はあっても良いことは断固実行すべきだ」という項目にみられるように、人生に目標を立てて、その目標に向かって頑張りま

まあものにしていくという考え方、そして良いことは多少の反対は物ともせず実行して行くというように積極的に人生に取り組んでいく姿勢が伺えるので積極性因子と名付けられた。第3因子は、「小さい頃から、お山の大将に成るのが好きだった。」や、「リーダーになって苦労するよりは、のんきに人に従っている方が気楽で良い。」、さらには「他人の面倒をみてやるのが好きで、他人から頼られる方だ。」という項目にみられるように主流派因子と解釈された。さらに第4因子は、一人で頑張って何かをやり遂げる意識が弱く(得点は逆加算)、さらに物ごとに妥協をしないで、自分の考えを貫き、悪いことに対して社会的に罰則が与えられることはしかたがないという考え方には賛同しない、つまり集団としての行動を大切に考え、自己主張は程々に協調性のたかい現在の若者世代を代表するような考え方を示していると考えられるので協調性因子と名付けられた。

1) 因子得点による男女の比較

次に、因子分析によって抽出された4因子の因子得点をもとにして、男女間の差をみてみることにする。図1は男女別のライフスタイル因子得点をプロフィールしたものである。図からみても男女差はあきらかではあるが、t検定の結果では1因子(伝統派家族因子)に1%水準で有意差がみとめられ、2因子(積極性因子、主流派因子)に

表5 バリマックス回転後の因子負荷量

ライフスタイル項目	バリマックス回転後の因子			
	第一因子	第二因子	第三因子	第四因子
1. 世の中でいちばん大切なことは、家族や仲間、みんなで仲良く力を合わせて協力していくということだ。	.7461			
2. 人間は一人では無力だが、みんなで力を合すれば相当なことができるものだ。	.7839			
3. 古いものは、長い間ずっと受け継がれてきたという良さがあるのだから、できるだけ残そうとする方だ。	.5938			
4. 社会には改革すべきことが多いが、改革は少しずつ徐々に気長にやるべきだ。	.4106			
5. すこし無理だと思われれる位の目標をたてて頑張る方だ。		.7585		
6. 多少波風がたってもそれをおそれては何もできない。多少の反対があっても良いことはだんご実行すべきだ。		.6010		
7. 遊びでも仕事でも、やりだすとことん熱中して、まあまあものにするほうだ。		.5041		
8. できるだけ新しいものを取り入れて、どんどん改革していく方だ。(逆加算)		-.7348		
9. リーダーになって苦労するよりは、のんきに人に従っている方が気楽でよい。(逆加算)			.7195	
10. 他人の面倒をみてやるのが好きで、他人から頼られる方だ。			.5530	
11. 小さい頃から、お山の大将になるのが好きな方だった。			.3982	
12. なにごともよらず、あまりガツガツやるのはきらいで、気ままにのんびりやる主義だ。			.5240	
13. 人生というものは結局一人ぼっちのものだから、ひとをたのまず、自分で頑張るしかないのだ。(逆加算)				.7857
14. どんな小さな罪でも、犯したものは必ず罰するということではないと、法律は正しく運用できない。				.4979
15. ものごとくに妥協するのはもっともよくない、自分の信念はできる限りつらぬくよう努力すべきだ。				-.3630

5%水準で有意差が認められた。男性は女性に比べると、積極性因子と主流派因子の因子得点が高く、反対に伝統派家族因子の得点が低い傾向を示した。つまり、男性は女性に比べると、遊びでも仕事でもすこしぐらい無理な目標を立て頑張ろう

とする意識が強いという傾向がみられた。反対に女性は男性に比べ、家族や仲間を大切にし、伝統を重んじながらみんなで仲良くしていくことが重要であると考えられる傾向がみられた。

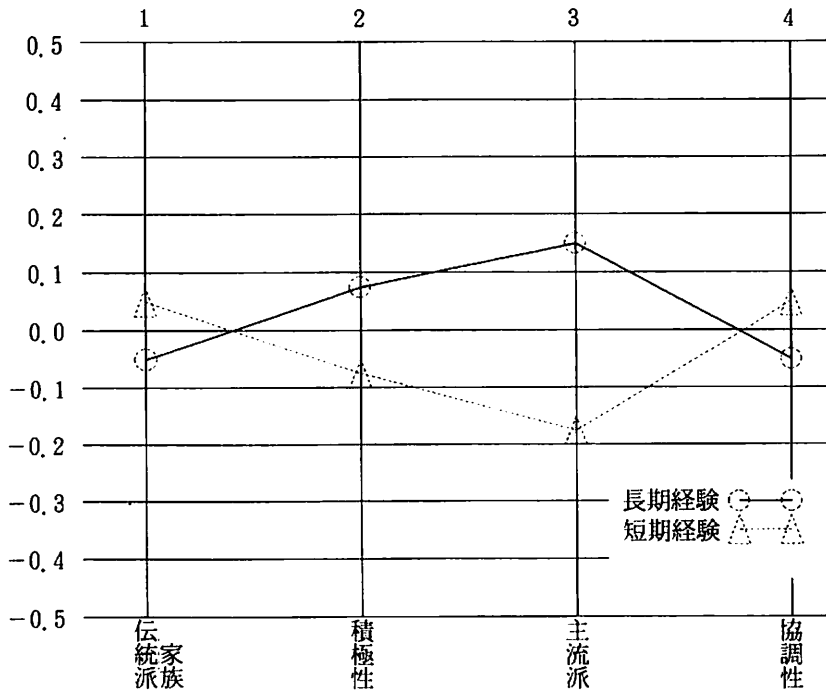


図1 因子得点による運動経験別プロフィール

2) 因子得点による学年の比較

次に、ライフスタイル因子が年次別にみた場合どのような関係をもつものなのかということを検討してみる。図2は学年別にライフスタイル因子の因子得点をプロフィールしたものである。年次によって因子得点はまちまちであるが、t検定の結果では伝統派家族因子において1年次と3年次との間に1%水準で有為な差が認められ、積極性因子においては2年次と3年次との間に1%水準で有為な差が認められた。つまり、3年次は1年に比べると、伝統派家族因子における得点が低く、逆に積極性因子において高い得点をえる傾向が伺えた。グラフをみても伝統派家族因子は年次が上がるにつれて得点が低くなり、逆に積極性因子は得点が高くなる傾向がみられた。伝統派家族因子の得点が1年次から3年次に成るにつれ低くなる

のが厳密に何を示すのか明らかではないが家族や仲間を大切に、集団で力を合せて何かを成し遂げようとする意識が弱くなることはあきらかである。一方、積極性因子は伝統派家族因子とは異なり、1年次と3年次が同じ様な得点で2年次だけが低い得点を示した。一生懸命に何かを成し遂げようとする積極性が2年次において一旦減少したものが3年次において取り戻したのではないかという推測はできるが統計的な根拠はない。その他のライフスタイル因子においては、主流派因子は学年間に差はなく、協調性因子は統計的に有為ではないが年次の上昇につれ高い得点を示す傾向が伺える。

3. 運動経験とライフスタイル因子との比較

大学生のライフスタイル因子と過去における運

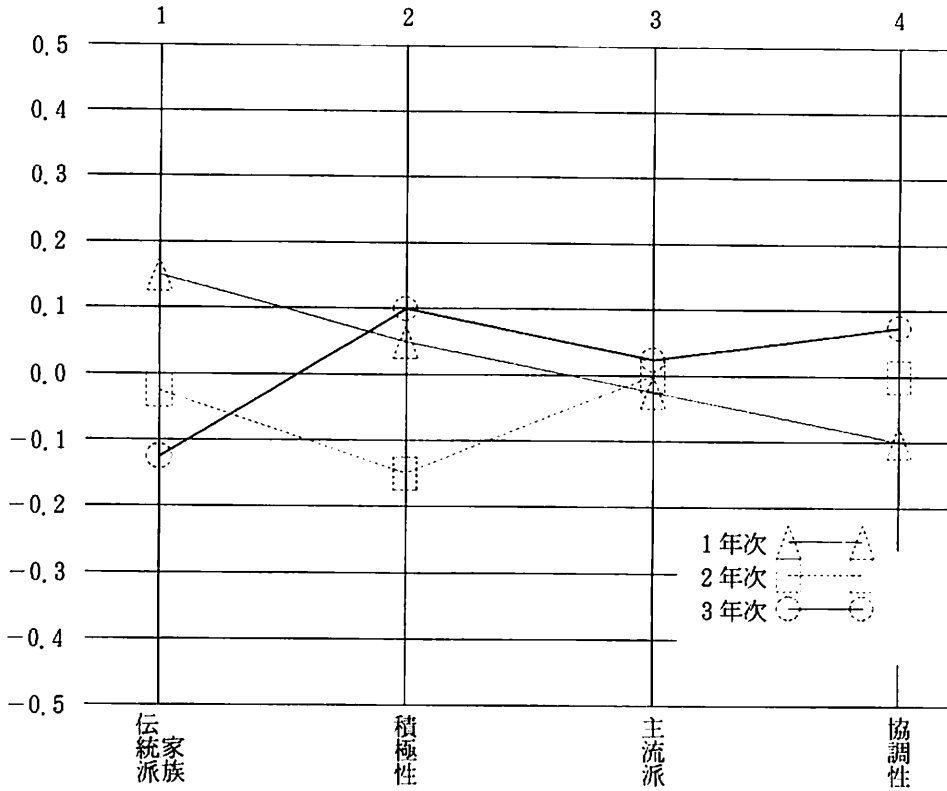


図2 因子得点による学年別プロフィール

動経験がどのように関係しているのかを検討するために、小学校から高校において運動部に所属した程度を基準に以下の2群に分けた。まず最初に、運動部経験が小学校、中学校、高校において2校以上にまたがって経験した長期運動経験群(以下、A群とする)とし、それ以外のものを短期運動経験者群(以下、B群とする)とした。

図3は、運動経験別にライフスタイル因子得点をプロファイルしたものである。図3をみるとA群とB群では、積極性因子と主流派因子においてかなりの得点差がみられる。t検定の結果では主流派因子において1%水準で、積極性因子において5%水準で有為な差が認められた。つまり、A群はB群に比べると積極性因子や主流派因子において高い得点をえる傾向がみられた。このことは運動経験が豊富なものは目標を立てて頑張ったり、ものごとに熱中しやすく、さらに実行力もあるといったことを示していると考えられる。

このように、過去の運動経験の程度とライフ

スタイル因子との間には様々な関係がみられたが、もう少し運動経験とライフスタイル要因との関係を具体的に検討するために、15のライフスタイル項目と過去の運動経験とのクロス集計を行い、これらの統計的検定には χ^2 検定を用いた。表6はその結果を示したものである。まず、小学校から大学までの運動経験とライフスタイル項目との関連をみてみる。ライフスタイル項目4の「社会には改革すべきことが多いが、改革は少しずつ気長にやるべきだ。」において、中学校における運動部経験者と非経験者との間に χ^2 検定の結果5%水準で有為な関連がみられた。つまり、運動経験者は非経験者に比べ「あまりそう思わない」と考えるものが多く、非経験者は「まあそう思う」と考えるものが多いという関連がみられた。次に、ライフスタイル項目7の「遊びでも仕事でも、やりだすととことん熱中して、まああ物にする方だ。」は、高校の運動部経験者は非経験者に比べ肯定するものが多いという傾向がみられた。さら

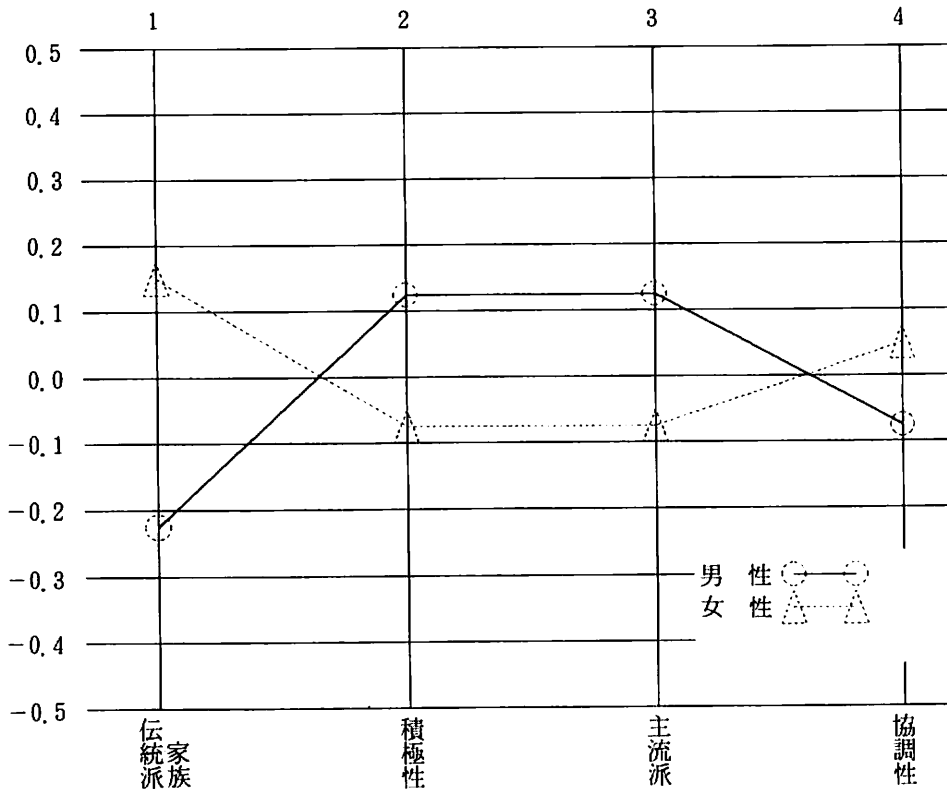


図3 因子得点による男女別プロフィール

に、高校運動部経験者はライフスタイル項目8「できるだけ新しいものをとり入れて、どんどん改革していく方だ。」においても肯定するものが非経験者よりも多いという傾向がみられた。そして、ライフスタイル項目11においては最も顕著な傾向がみられ、 χ^2 検定の結果、すべての学校における運動部経験とライフスタイル項目1との間に有為な関連が認められた。つまり、運動部経験者は非経験者に比べ、ライフスタイル項目11「小さい頃から、お山の大将になるのが好きな方だった。」において、「そう思う」、「まあそう思う」が多く、非経験者は「あまりそう思わない」、「全然そう思わない」多いという傾向を示した。つまり、小学校から大学までの間に運動部に所属した経験を持つものは「小さい頃から、お山の大将になるのが好きな方だった。」という意識を非常に強くもっていた、あるいは持っている傾向を示していると考えられる。このことから、運動経験者は小さい頃は集団の中でのリーダー的な存在を好

む、あるいはリーダー意識の強いものがスポーツを好むのではないかと推測される。

さらに、運動経験（2群）とライフスタイル項目との関連を分析した結果、3項目（項目7、項目9、項目11）と運動経験との間にそれぞれ有為な関連が認められた。つまり、A群がB群に比べそれぞれのライフスタイル項目において肯定する意見が多いという結果であった。このことは、運動経験の豊富なものはものに熱中しやすく、小さい頃はリーダー的な存在を好む。しかし、現実にはリーダーになって苦労することは好まないという傾向を示しているとかんがえられる。以上のことから、小さい頃のリーダーになりたいという意識はスポーツとの関連を強めるが、徐々にリーダーになって苦労するよりは気楽にやっていきたいという考えに変化して行くのではないかと推測される。

IV まとめ

本研究は、ライフスタイル概念を運動者分析に応用し、大学生を対象に過去における運動経験の程度と運動者のライフスタイル要因を比較検討することにより、運動経験者のライフスタイル的特性を明らかにするために行われた。主な結果は以下の通りである。

1. 大学生のスポーツ行事への参加状況は、「ほとんど参加しない」と「全く参加しない」を合せると約7割であった。運動施設の利用状況においても同様の傾向がみられた。一方、地域におけるスポーツ行事の参加は1割程度ある。しかし、運動施設の利用状況は約5割の学生が利用しているという結果であった。
2. 大学生のライフスタイルを規定していると考えられる4の因子を抽出した。それぞれ、伝統派家族、積極性、主流派、協調性因子と名付けられた。
3. 性別とライフスタイルとの関連を、因子得点により比較した。その結果、1因子(伝統派家族)に1%水準で、2因子(積極性、主流派)に5%水準で有意差が認められた。
4. さらに、学年別にライフスタイルとの関連を因子得点により比較した。その結果、伝統派家族因子において1年次と3年次との間に1%水準で有意な差が認められた。さらに、積極性因子においても2年次と3年次との間に1%水準で有意な差が認められた。
5. サンプルを運動経験の程度によって2群(A群、B群)に分け、因子得点により比較した。その結果、主流派因子において1%水準で、積極性因子においては5%水準で有意な差が認められた。つまり、A群はB群に比べると積極性因子や主流派因子において高い得点をえる傾向がみられた。このことは運動経験が豊富なものは目標を立てて頑張ったり、ものごとに熱中しやすく、さらに実行力もあるといったことを示していると考えられる。さらに、もう少し運動経験とライフスタイル要因との関係を具体的に検討するために、15のライフスタイル項目と過去の運動経験とのクロス集計により分析を試みた。その結果、運動経験とライフスタイル項目

11とに顕著な傾向がみられた。つまり、小学校から大学までの間に運動部に所属した経験を持つものは「小さい頃から、お山の大将になるのが好きな方だった。」という意識を非常に強くもっていた、あるいは持っていると考えられる。このことから、運動経験者は小さい頃は集団の中でのリーダー的な在を好む、あるいはリーダー意識の強いものがスポーツを好むのではないかと推測される。

参考文献 (References)

- 1) 飽戸弘 (1986) 日本のヤッピーの実証的研究。消費と流通 10(2): pp 13-32.
- 2) 飽戸弘 (1985) 消費文化論～新しいライフスタイルからの発想～. 中央経済社: pp 3-17
- 3) 飽戸弘・松田義幸 (1989) ゆとり時代のライフスタイル. 日本経済新聞社: 東京, pp.39-50.
- 4) 荒井貞光 (1982) 現代人のスポーツ行動に関するスポーツ社会学的分析と考察～成人のスポーツ集団参加の分析から～. 広島大学総合科学部紀要Ⅱ 社会文化研究第8巻: p 165-201.
- 5) 原田宗彦・菊池秀夫 (1990) スポーツ参加者のライフスタイルに関する研究. 体育学研究. 35: pp 241-251.
- 6) 池田 勝・江橋慎四郎・永吉宏英 (1976) 勤労青少年のスポーツ実施を規定する要因の分析. 日本体育学会第27回大会号: p 214.
- 7) 岩井浩一・大山良徳・山下秋二 (1988) 中高年のライフ・スタイルと健康に関する研究～健康のためのスポーツ・運動の取り組み～. 大阪大学健康体育部紀要. 第3巻: pp 67-73.
- 8) 金崎良三・多々納秀雄・徳永幹雄・橋本公雄 (1982) 学生のスポーツ行動の規定要因に関する研究(3)～スポーツ関連要因について～. 健康科学 4: pp.77-89.
- 9) 菊池秀夫・原田宗彦 (1989) 民間スポーツクラブ会員のライフスタイルの構造～性差と結婚の有無による差異について～. 鹿屋体育大学研究紀要. 第4号: pp 97-107.

- 10) 久保良敏・長町三生・片岡 晃 (1977) 現代学生のリライフ・スタイルに関する研究. 実験社会心理学研究 17-1 : pp.60-73.
- 11) ミッチェル・吉福伸逸監訳 (1987) パラダイム・シフト～価値とライフスタイルの変動期を捉らえる VALS 類型論～. TBS プリタニカ
- 12) 永吉宏英・江橋慎四郎・糸野 豊・島崎 仁 (1974) スポーツ活動成立要因に関する研究－林の数量化理論第11類を用いて－. 日本体育学会第25回大会号 : p 421.
- 13) 中西純司・浪越一喜 (1989) ライフスタイル・セグメンテーションにみるスポーツ消費者の実証的類型化. 体育・スポーツ経営学研究 6(1) : pp 22-35.
- 14) 丹羽劭昭・村松洋子 (1979) 女子大生のスポーツ参加の動機に関する因子分析的研究. 体育学研究第24巻第1号 : pp 21-38.
- 15) 丹羽劭昭・長沢邦子・ (1978) 女子大生のスポーツ参加を規定する要因の検討. 体育学研究第23巻第2号 : pp 109-119.
- 16) 丹羽劭昭・長沢邦子・浅井 修 (1981) 女子大生の体育実技への態度を規定する要因の検討. 体育学研究第25巻第4号 : pp 251-260.
- 17) 小椋 博・中村 誠・影山 健・二条康邦・金本益男 (1976) 労働とスポーツの関連性の分析. 日本体育学会第27回大会号 : p 215.
- 18) 品田龍吉・北村虎雄・広田 彰・泰泉寺 尚 (1983) 大学保健体育の現状と課題 (第4報) ～スポーツ活動に対する意識のパターン分類とその規定要因～. 宮崎大学教育学部紀要 芸術・保健体育・家政・技術第54号 : pp 101-113.
- 19) 泰泉寺 尚・北村虎雄・広田 彰・品田龍吉 (1983) 大学保健体育の現状と課題 (第3報)「生涯体育活動への意思を規定する要因の分析」～正課・課外体育関連要因を中心として～. 宮崎大学教育学部紀要 芸術・保健体育・家政・技術第54号 : pp 81-100.
- 20) 多々納秀雄・金崎良三・徳永幹雄・橋本公雄 (1982) 学生のスポーツ行動の規定要因に関する研究(2)～社会的要因について～. 健康科学 4 : pp.51-76.
- 21) 徳永幹雄・橋本公雄・多々納秀雄・金崎良三 (1982) 学生のスポーツ行動の規定要因に関する研究(1)～心理的・身体的要因について～. 健康科学 4 : pp.35-49.